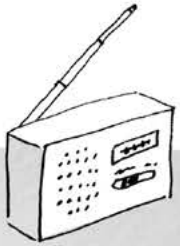
ケアするラジオ

寄り添うメディア・コミュニケーション



金山 智子 編

さいはて社

目次

Sample

はじめに　10
1　ラジオのケア的役割と社会的評価　10
2　歴史からみるラジオの親密性　13
3　メディアによるケア・コミュニケーションの位置づけ　15
4　本書の構成　17

第Ⅰ部　ラジオによるケア　21

第1章　なぜラジオは親密なメディアか　福永健一　22
1　ラジオとケアをつなぐ「親密さ」　22
2　ラジオの親密さとは何か　25
2-1　「親密なラジオ」の誕生　25
2-2　口調による親密さのメカニズム　31
2-3　「親密なラジオ」のヴァリエーション　35
3　物質的特性からみたケア・メディアとしてのラジオ　39
4　ラジオによるケアの課題　42

第2章　ラジオによるケア・コミュニケーションとは　金山智子　44
1　はじめに　44
2　ケアの倫理とは　46
3　マスメディアとケア　50
4　デジタルメディアとケア　54
5　ラジオの放送トーク　57
6　ケアと対人関係コミュニケーション　60
7　ラジオによる五つのケア・コミュニケーション　65
8　おわりに　76

第Ⅱ部　ケアするラジオ　79

第3章　「知ること」から寄り添う島ラジオ　金山智子　80
1　はじめに　80
2　全国初の公設民営型ラジオ局エフエムうけん　81
3　自社制作番組とリスナー投稿　83
4　メッセージカードと子どもの語り　87
5　お年寄りの語りと自己肯定　93
6　ラジオを介した「知っている」つながり　99
7　おわりに　103

第4章　立ち直りを支える刑務所ラジオ　芳賀 美幸　105
1　はじめに　105
2　「沈黙」の刑務所　106
3　所内向けラジオの役割と可能性　108
3-1　誕生の経緯と制作の担い手たち　108
3-2　友人のようなDJ　112
3-3　想像の他者と出会う場　114
3-4　受刑者による受刑者の番組　116
3-5　メッセージを書く・聴く　119
4　内と外のつながりを創る　125
4-1　コウセイラジオについて　127
4-2　当事者が語る意味　127
4-3　共通体験を超えた共感　129
5　刑務所ラジオに見るケア　132

第5章　ナラティヴ空間としてのホスピタルラジオ　小川 明子　135
1　はじめに　135
2　イギリスにおけるホスピタルラジオ　136
2-1　ホスピタルラジオとは何か　136
2-2　ホスピタルラジオの歴史　137
2-3　ホスピタルラジオの現在　141
3　日本における展開　147
3-1　NHKテレビ『病院ラジオ』　147
3-2　藤田医科大学院内ラジオ『フジタイム』　151
4　病とラジオ――再生のためのナラティヴ空間　158
5　おわりに　162

第6章　ラジオのつながりが拓く多文化共生　吉富 志津代　166
1　はじめに　166
2　震災の救援基地に生まれた市民メディア　169
3　ひょうごラテンコミュニティ（HLC）の設立経緯と活動　173
4　HLCの防災教育活動の広がり　180
5　おわりに　182

第7章　子どものラジオ番組制作と地域のつなぎ直し　久保田 彩乃　186
1　地域コミュニティの分解と断絶――ラジオによる「つなぎ直し」の試み　186
2　「地域の子ども」という存在　189
2-1　〝町の音〟の放送――町を思い出させる子どもの声　189
2-2　「富岡今昔物語」――世代間交流の場から地域の記憶伝承の場への変化　192
2-3　地域を知らない子どもたち――ふるさと学習とアイデンティティへの葛藤　198
3　「ふるさと」という場所の意味　205

3-1　消えゆく爪痕――「避難経験地域」の記憶を伝える　205
3-2　「広中ルーツプロジェクト」――この町に暮らすワケを知る　207
3-3　「次の皆既月食の時に、帰ってこよう」――他者の経験に共感する　211
4　「ラジオ×子ども」がもたらす地域のつながりの持続可能性　216

第Ⅲ部　音声メディアとケア　221

第8章　ケアというメディア・コミュニケーション　金山智子　222
1　はじめに　222
2　マスメディアを介した対人コミュニケーションの必然性　223
3　ラジオによるケア・コミュニケーションの四つの重要性　226
4　デジタル環境における音声メディアのケア・コミュニケーション　231
5　おわりに　235

［特別寄稿］なぜラジオはケアするメディアになったのか　小玉美意子　238

おわりに　248

参考文献　263

執筆者紹介　265

Sample

はじめに

1　ラジオのケア的役割と社会的評価

二〇二〇年春、世界的に拡大した新型コロナウィルス感染症（以下「コロナ」）のパンデミックは、ラジオのケア的な役割に改めて注目を集めることとなった。新たな災害とも受け止められた状況の中、誰もが先の見えない不安やストレスを抱えて日々を送らざるを得なかったことは記憶に新しい。ステイホームの状況下で、人々は否応なくメディアに依存するようになり、不安や孤立、ストレスの解消の機能を果たしてくれるメディアはとても大事だった。

コロナ禍において各国でラジオ聴取調査が行われたが、ステイホームにより在宅時間が増え、ラジオ接触の増加が傾向として報告された[*1]。当然の結果ではあるが、ここで注目すべきは多様なメディアの中で人々がラジオを選択した理由

1 Media Tracks Communications, 2020. “How COVID-19 Will Change the Radio Industry” https://mediatracks.com/resources/how-covid-19-will-change-the-radio-industry/ (Access 2020/12/20); Rodero, E., 2020. “Radio: the medium that best copes in crises. Listening habits, consumption, and perception of radio listeners during the lockdown by the Covid-19” El profesional de la información, 29(3):1-14; ビデオリサーチ, 2020. “新たな生活環境下でラジオリスナーが増加傾向” https://www.videor.co.jp/press/2020/200625.html (Access 2020/12/20)

である。ネットやテレビへの低い信頼性と比べて、ラジオの信頼度は依然として高かった。また、平素は地元に無関心な人たちでさえ、ステイホームで移動できなくなると、ラジオを通して地元コミュニティの情報を取得した。コミュニティの情報は地域とのつながり感を与え、ストレスや不安の軽減につながったのである。放送を批評する専門誌『ＧＡＬＡＣ』二〇二一年九月号[*2]で「ラジオのポテンシャル」と題した特集が組まれた。その中で雑誌編集者の永須智之は次のように語っていた。

> コロナ禍で、人との接触は明らかに減っている。リモート出社、オンライン授業が当たり前となり、介護や医療の現場は疲弊している。テレビを見ても、その状況を伝えることが中心で、自分のほうを向いているようには思えない。しかもテレビは制約が多いからか、極端な意見が聞かれることは少ない。ＳＮＳで簡単に人と繋がれる時代ではあるが、こちらはむしろ感情がむき出しになりがちで、注意して受け取らなければ、自分がますます疲弊してしまうことになりかねない。
>
> 本人の（文字通り）声がはっきり伝わり、メディアとしての適度なモラルが保障され、何より自分の心に接触して、語りかけてくれている気がする……こうした欲求に合致するメディア、それがラジオなのだ。そして、これまで

2 放送批評懇談会『ＧＡＬＡＣ』二〇二一年九月号、ＫＡＤＯＫＡＷＡ

ラジオに触れなかった人たちが、そのことに気づき始めたということだ[*3]。

コロナ禍の社会では、国や地域にかかわらず、ラジオが孤独や寂しさを軽減し、ストレスや不安を紛らわせるメディアであると感じる人が多くなった。ラジオによるコミュニケーションが人々を気遣い、時には配慮するという「ケア的な役割」を担っていることが改めて認識されたのである。ネットによるポッドキャストやストリーミングといった音声メディアを聞く人たちにもラジオと同様の現象がみられた。注目すべきは、ポッドキャストのリスナーが、音楽ではなく、人の話を聞く時間を増やしていたことである。その理由として、他のメディアのネガティブなコンテンツからの脱却があげられており、三分の二が孤独感の軽減のためと答えていた[*4]。現代のストレスはコロナだけでなく、社会を分断するようなネット上でのフェイクニュースや極端な発言、あるいは感染症に関する辛いニュースなど、外的なメディア情報に起因しているものがある。人の話や語りに癒しを求めるのは、仲間や話し相手からのケアを感じたいからであり、情報を媒介するメディアとしてのポッドキャストもケア的な機能を果たしていることが推察される。

3 永須智之「新しい〝信頼〟を武器にしたラジオのパワー」前掲一四頁。

4 Inside Radio, 2020. “Intimacy Gives Way to Companionship as Podcasts Connect with Pandemic-Weary Listeners” http://www.insideradio.com/free/intimacy-gives-way-to-companionship-as-podcasts-connect-with-pandemic-weary-listeners/article_297b74c2-1365-11eb-a0b2-db0a1a5f72f2.html (Access 2020/12/20)

2 歴史からみるラジオの親密性

ラジオ放送は一九二〇年に米国で始まり、英国、ドイツ、ソビエト、フランスなど一五か国がそれに続き、日本では一九二五年に開始された[*5]。太平洋戦争下では強力なプロパガンダのツールとなったが、一方でニュースや娯楽など生活を支える大衆メディアとして急速に発達・普及していった[*6]。ラジオ研究も、さまざまな理論や方法論に依拠しながら、ラジオという当時のイノベーション・メディアの普及開始から百年経った現在に至っている[*7]。他方、時代や状況が変化していく中、インターネットの急速な普及により、ラジオ聴取者は減少し、併せて広告収入が激減した。現代のラジオはもはや衰退を辿るメディアと言われて久しい。しかし、現在でもラジオは消滅せず、むしろradiko（ラジコ）などネット配信による新たな形態を成立させ、加えてSNSと連動しながらオンラインラジオとして発展し、多様な形態をもって他のメディアとの違いを際立たせている感すらある。それは、報道や娯楽といったメディアが本来果たしてきた役割以上に、ラジオがリスナーにとって「親密なメディア」あるいは「寄り添うメディア」であり続けているからに他ならない。

ラジオの特性にかかわる知見は、時代が変わっても、多くの研究によって報告

5 竹山 2002

6 Sterling and Kittross 2002

7 例えば、Lazarsfeld 1941; 水越 1993

され続けている。例えば、八〇年前の古典的なラジオ研究の一つであるヘルタ・ヘルツォークによるラジオドラマ・リスナーの動機と満足に関する調査がある[*8]。主婦にとって昼の連続ラジオドラマは、日常的な感情を解放してくれたり、希望的観測を持たせてくれたりなど、ドラマから何かしら現実の生活に役立つような助言を得る機会であることが浮き彫りにされた。トークバック番組がラジオの人気フォーマットになると、番組リスナーとのトークがリスナーにとってセラピーや交友を深める機会となり、リスナーの幸福に寄与していることが示された[*9]。日常的なラジオ聴取とは別に、自然災害など非常時でのラジオのケア的な役割も重視されてきた。ラジオは物心両面の喪失で傷ついた被災者の心を癒す存在であり、避難生活を送る住民たちや復興を目指す人たちに寄り添うメディアであることが、国や地域にかかわらず報告されてきた[*10]。自然災害などの有事が発生する可能性が高まっている社会において、ラジオのこの役割は今も変わらず重要なのである。ストリーミングやポッドキャストといった新しい音声メディアについての新しい研究も続々と行われている。近年の調査では、客観的で実体のない記者のジャーナリズム規範とは対照的に、ポッドキャスト・ジャーナリズムでは、ジャーナリストとリスナーの間に親密な関係を築くために、感情や一人称の報道を中心に作られた物語的要素を用いていることが報告されている[*11]。

8 Herzog 1944

9 Ewart 2011

10 Moody 2009; 粟屋ほか 2014; 災害とコミュニティラジオ研究会編 2014; 大臼 2018; 大牟田ほか 2021

11 Lindgren 2021

3 メディアによるケア・コミュニケーションの位置づけ

時代や形態にかかわらず、ラジオという音声メディアは、さまざまな形で多様なリスナーたちをケアする役割を果たしてきた。一方、ラジオのケア的役割については、マス・コミュニケーション研究の枠組みでは、娯楽の一部として考えられるか、または、能動的な受け手による満足として限定的に捉えられている。そうでなければ災害時などにおけるリスクコミュニケーションとして扱われることが多く、メディア・コミュニケーション論において明確に体系づけられることはほとんどなかった。小玉美意子は、「私たちはこれらのメディアを、心を癒してくれるケア・コミュニケーションとして利用している。ケアのコミュニケーションもまた、私たちを取り巻く機能の一つとして現代生活に必要なものである[*12]。」とし、コミュニケーションの基本機能にケア・コミュニケーションが加わる意義を強調している。現在も科学的で、メディアの機能的な側面からの研究手法が中心となるメディア研究の文脈において、感情や感性を重視した主観的あるいは間主観的なコミュニケーションを学術的な視点から体系づけることは容易ではない。これまでの先行研究の多くは事例にもとづく調査やインタビューなどの質的調査が中心となっており、量的調査などによる一般化・理論化はなされておらず、示

12 小玉 2012: 71

唆的発見または知見の提示という報告レベルで止まっている。ケアという主観的かつ間主観的なコミュニケーションを体系づけていくためには、複数のデータ、多様な調査者や調査手法を用いるといったトライアンギュレーションのアプローチがこれまで以上に求められる[*13]。

メディアによるコミュニケーションが個々人の文脈と感情によってケア・コミュニケーションとして位置づけられるには、可変的なケア・コミュニケーションの考えを軸にメディアの役割や機能を再考していくことが必要である。それは現代のリスク社会において一層重要なアプローチとなる。これまで、メディアは民主的な社会や公共の福祉のために機能する存在との考えをメディア研究の基本としながらも、「個人の欲求や愛情に応えるために機能する存在とは考えてこなかった[*14]」。ケアの実践がメディア・コミュニケーションの役割としてリンクして認識されていないという背景がここにある。

ラジオの多様な番組が、多様な文脈において、人々を癒し、励まし、あるいは、支えるなど、寄り添うメディアであることがさまざまな研究によって明らかにされてきた。それだけでなく、近年では、ラジオのケア的なコミュニケーションを意識的に活用した取り組みが多様な現場で実践されている。こういったメディア実践の意義は、メディアの発達史の観点から、メジャーかオルタナティブかという二項対立的な側面から捉えられてきた。結果としてラジオによるケア的なコミュニケーションの実践は、オルタナティブな実践という平板な見方から評価されるに留まらざるを得ない状況にある。

その中、小玉はこれまでメディアの分類や形態に重点を置くコミュニケーションとは異なり、情をその中心に据えて「癒し・つながり・愛着のコミュニケーション」という新たな側面を加えることの必要性を説いた[*15]。それはこれまでのメディア・コミュニケーション論とは異なるケアの倫理に重点を置くことを意味している。本書では、ラジオというメディアを通したケア・コミュニケーションが一体どのようなものなのか、いかにしてリスナーにとってケアとなるのかという根源的な問いを起点とする。その際、ケアの概念を基底に置いた上で、多様なラジオ実践によるケア・コミュニケーションを考察していく。そして、メディア研究の中に「癒し・つながり・愛着のコミュニケーション」という感情・感性・主観の研究視座を体系づけ、メディアとケア・コミュニケーション研究に関する新たな研究基盤と実践分析の地平を切り開いていくことを試みる。

4　本書の構成

本書の構成は次のとおりである。ラジオは普及してまもなく、人々に親密なメディアと認識されてきたが、第Ⅰ部では、親密なメディアとしてのラジオについ

13 Denzin 1978

14 小玉 2012: 69

15 小玉 2012: 70

て歴史から見直し、ケアの倫理という新たな視座によるラジオの理解の必要性について解説する。第1章では、音声メディアであるラジオがいかにして親密なメディアとなったのかを歴史的に紐解いていく。第2章では、本書が軸とするラジオのケア・コミュニケーションとは何か、その基底となるケアの倫理とともに説明していく。第Ⅱ部では、多様な現場での多様なラジオ実践について報告していく。まず第3章では、奄美大島の小さな村のコミュニティラジオから、地元のお年寄りや子どもをケアする番組を紹介し、ラジオを通した地域のケアについてみていく。第4章では、刑務所という社会的に隔絶された場所で実践されている受刑者たちを対象とした刑務所ラジオについて、ケアの視点から考察する。そして、刑期を終え更生しようとしている人たちを支援するラジオ番組についてもみていく。第5章では、病院という限定された空間の中で、医師・看護師と患者、いわゆるケアする／されるといった人たちがラジオ実践を通して、その関係性をどのように変化させていくのかを考察する。第6章では、阪神・淡路大震災をきっかけとして開局された多言語のコミュニティラジオ―FMわぃわぃが、いかに多様な文化的背景をもつ住民たち同士のケアとなってきたのか、二五年以上にわたるラジオを中心とした取り組みを介しながら目指す文化共生社会について考察していく。第7章では、福島第一原子力発電所事故で全町避難の対象となった地域である福島県富岡町と広野町を舞台に、ラジオ番組制作を通して、被災地の子どもたちが自ら震災について学び、情報発信していく復興ラジオプロジェクトについて報告する。第Ⅲ部では、メディア研究におけるケア・コミュニケーションについて総括する。第8章では、これまでの実践報告にもとづきながら、ラジオのケア・コミュニケーションがいかにメディア・コミュニケーション論に位置づけられるのかを、今後の検討課題を含めて論じていく。最後に、ラジオのケア・コミュニケーションを通して、メディア研究に「癒し・つながり・愛着のコミュニケーション」を体系づけることの意義について再考していく。

メディアによって社会的不信や分断が起こされていく時代であるが、同時にメディアを通して人々は癒され、互いに頼り合う時代であることも紛れもない事実である。メディアに依存していく社会であるからこそ、メディアを通したケア・コミュニケーションが私たちにとって大切であることを本書から改めて感じていただけることを願う。

金山智子

おわりに

インターネットが急速に普及していくのと同時進行で、ラジオという古いメディアは「終わる」と言われるようになった。そのような環境の下だからこそ、コミュニティラジオから公共ラジオに至るまで、幅広くメディアの存在意義が問われたし、その都度「寄り添うメディア」であることが大義とされ、その拠り所となり得た。本書を貫いている「寄り添う」あるいは「親密」といった人間的な言葉やニュアンスについて、ラジオメディアにかかわる人々は、伝わっていると思ってきたし、自明のようにも感じてきた。

それゆえ、厳しいコロナ禍にあっても、ラジオに惹きつけられる人たちが増えたことは理解できる。そして、それは当然のこととも感じられる。同時に、これまでラジオが背負う免罪符のように言ってきた「寄り添うメディア」あるいは「親密なメディア」とは、一体どういうことなのか、それを明確に説明していないことに改めて気づかされた。

このことから、自分の分野であるメディア・コミュニケーション研究の中で、新たにケアの倫理という視点をもって正面から取り組むべきだと強く感じた。そして、ラジオの研究に携わってきた身としての反省の気持ちをもって、本書を出すことを決めた。

本書では、一般的なラジオ番組も扱いつつ、事例を取り上げた章では刑務所や病院、離島や被災地といった一般的にはあまり馴染みのない特定の地域や場所におけるラジオによるコミュニケーションのあり様を取り上げた。こういった事例は特殊なケースだと思う読者がいるかもしれない。しかし、そうではなく、人はどんな環境や状況においてもケアを必要としていて、小さくとも自分の声に耳を傾けてくれる機会を必要としていること、そして、小さな機会であっても、それが日々の暮らしの中で支えになることを示す多様な事例であることを理解していただければと思う。読者に、前述した筆者たちの思いを受け取り、何かを感じていただけるとすれば、本書を世に問わせていただいた趣旨に沿うことになる。

メディアがまるで四輪駆動のごとく、日々刻々と社会を押し上げてくるような現代に私たちは生きている。だからこそ、本書全体を通じたメッセージである「メディアがケア的な役割を果たすことは必要不可欠である」という思いが伝わることを願う。

ラジオという放送メディアは、なくなるどころか、ポッドキャストなどデジタル音声メディアとして発展し、今では若者たちに支持されるメディアになってきた。二〇二三年晩秋、調査で本土最南端にある南大隅町を訪れた。そこでは、二人の町民が、廃校になった地域の小学校をスタジオにしてポッドキャスト「すみっこキャスト」の収録を行っていた。町民の多くが農家というこの地で、「農家は忙しいときも耳だけは空いているから、そんな時間を使って楽しんだり学んだりしてもらいたい[*1]」と始めたポッドキャスト。筆者の仲間も番組ゲストに呼ばれた。遠路はるばる北海道から来た仲間たちは、本土最南端で自分たちの話を聞いてくれたことに感激していた。まさに、「癒やし・つながり・愛着のコミュニケーション」の実感である。

ラジオ同様、ポッドキャストのような音声コンテンツにおいても、パーソナリティや話し手を友人のようだと感じさせるパラソーシャル・インタラクションの機能を感じさせるものが多い。最近では、ＡＩ技術によってポッドキャストの文字起こしが簡単にできるようになった。それによってトークが文字としてシェアされるようになり、新たな聴取体験として注目されるようになった。本書でも取り上げた会話分析においても、文字起こししたトークを丹念に読むが、文字化されても音声で聴いたときと変わらず、その内容が受け止められる。ラジオやポッドキャストといった音声メディアのトークが、音声からテキストへと変換されても、そこで起きている親密なコミュニケーションのあり方は変わらずリスナーに伝わっていくし、生き続けていく。

本書を締めくくるにあたり、「さいはて社」の大隅直人さんに、深くお礼申し上げたい。いつも寄り添いながら進めて下さる編集者の存在は心強かった。最後に、本書の執筆にあたり協力していただいた多くのリスナーやパーソナリティ、ラジオ局のみなさまに、心からの感謝をお伝え申し上げます。

二〇二三年一二月

金山智子

1 赤崎英記 2023「ローカルフレンズ南大隅編② 農家の日常」ＮＨＫ鹿児島放送局（https://www.nhk.or.jp/kagoshima/report/article/002/49/）

執筆者紹介　＊執筆順

金山 智子（かなやま・ともこ）

現在 / 情報科学芸術大学院大学教授
最終学歴 / オハイオ大学大学院コミュニケーション研究科博士後期課程修了（博士［マスコミュニケーション学］）
著書·論文 /『コミュニティ·メディア——コミュニティ FM が地域をつなぐ』（共著）金山智子編、慶應義塾大学出版会、2007 年。『小さなラジオ局とコミュニティの再生——3.11 から 962 日の記録』（共著）災害とコミュニティラジオ研究会編、大隅書店、2014 年。

福永 健一（ふくなが・けんいち）

現在 / 四国学院大学社会学部助教
最終学歴 / 関西大学大学院社会学研究科博士後期課程修了（博士［社会学］）
著書・論文 /「声のメディア史——1870 年代から 1930 年代の米国における電気音響メディアの歴史社会学的研究」関西大学博士審査学位論文、2020 年。「拡声器の誕生——電気音響技術時代における拡声の技術史と受容史」『音と耳から考える——歴史・身体・テクノロジー』（共著）細川周平編、アルテスパブリッシング、2021 年。

芳賀 美幸（はが・みゆき）

現在 / 名古屋大学大学院情報学研究科博士前期課程在籍中／中日新聞記者
最終学歴 / 青山学院大学国際政治経済学部
著書・論文 /「刑務所ラジオにみる『承認』のコミュニケーション——受刑者と DJ へのインタビューから」『社会情報学』12(3)、2024 年。

小川 明子（おがわ・あきこ）

現在 / 名古屋大学大学院情報学研究科准教授
（2024 年 4 月より立命館大学映像学部教授）
最終学歴 / 東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程中退
（博士［学際情報学］）
著書・論文 /『デジタル・ストーリーテリング——声なき想いに物語を』リベルタ出版、2016 年。『ケアする声のメディア——ホスピタルラジオという希望』青弓社、2024 年。

吉富 志津代（よしとみ・しずよ）

現在 / 武庫川女子大学国際センター長／心理・社会福祉学部教授
最終学歴 / 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了（博士［人間・環境学］）
著書・論文 /『多文化共生社会と外国人コミュニティの力——ゲットー化しない自助組織は存在するか？』現代人文社、2008 年。『ソーシャルビジネスで拓く多文化社会——多言語センター FACIL・24 年の挑戦』（共著）吉富志津代監修明石書店、2023 年。

久保田 彩乃（くぼた・あやの）

現在 / 福島大学教育推進機構特任助教／一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ代表理事
最終学歴 / 東北大学大学院情報科学研究科博士前期課程修了（修士［情報科学］）
著書・論文 /「3.11 アーカイブにおける福島の人々の声の記録「Voice of Fukushima」の意義と今後の可能性に関する考察」『デジタルアーカイブ学会誌』5(4)、2021 年。「メディア制作を通じた子どもの「地域とのつながり」認識の変容に関する研究」『メディア研究』101、2022 年。

小玉 美意子（こだま・みいこ）

現在 / 武蔵大学名誉教授
最終学歴 / お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程満期退学
著書・論文 /『新版ジャーナリズムの女性観』学文社、1991 年。『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』学文社、2012 年。

ケアするラジオ
――寄り添うメディア・コミュニケーション

2024年 3月 25日　第1刷発行

編　者　　金山 智子

発行者　　大隅 直人

発行所　　さいはて社

〒525-0067　滋賀県草津市新浜町 8-13
電話 050-3561-7453　　FAX 050-3588-7453
URL　https://saihatesha.com
MAIL　info@saihatesha.com

組　版　　田中　聡

装　幀　　早川 宏美

印　刷　　共同印刷工業

製　本　　新生製本

Copyright ©2024 by Tomoko Kanayama Printed in Japan
ISBN 978-4-9912486-3-4